

日本人学習者の英語コミュニケーションにおける苦手意識と流暢性 —質的調査と量的調査からの分析—

Senses of Weakness and Fluency for Japanese Learners of English —Through Qualitative and Quantitative Approach—

滝沢 恵子 (Keiko Takizawa) 指導：菊池 英明

1 はじめに

文部科学省が平成15年に策定した『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』では、実践的な英語コミュニケーション能力をつけることが目標として強調されている。日本人学習者が目指す英語コミュニケーションとはどのようなものであるのか、それこそが本研究のテーマであり、そのテーマを追求することで日本人学習者が英語コミュニケーション力をつけるための教育的示唆を得られると考えられる。本研究は1つの調査と2つの研究から成る。

2 事前調査「高校卒業生（現大学生）が高校英語教育と大学英語教育に求めるもの—縦断的記述式アンケート調査からわかること—」

学校間の連携の1つとして「高校から大学」への英語教育を考え、英語学習者が高校英語教育と大学英語教育に求めることと実際の教育が一致しているか、そして高校・大学間の連携がうまくできているかという点を、学習者の視点から探る。

2.1 調査方法 自由記述式アンケートを高校生183名、大学生42名に行い、回答をコーディングしカテゴリーに分類、分析した。

2.2 考察 高校・大学の英語教育において学習者の期待と実際の英語教育との間のずれが考察され、高校・大学間のスムーズな英語教育の移行が求められていた。

3 研究Ⅰ「日本人英語学習者の『苦手』と『ペラペラ』の間の意識分析—インタビューで語る学習者のことばから—」

英語コミュニケーション力に対して学習者は実際どう考えているのか、どうすれば英語コミュニケーションが苦手ではなくなるのか、日本人学習者の苦手意識をインタビュー調査から具体的に明らかにする。

3.1 研究方法 半構造化インタビューを大学生以上の英語習熟度が異なる学習者10名に行った。

3.2 考察 英語コミュニケーションにおける「苦手意識」はいくつかの要因が絡み合っているものであった。英語が「苦手」から「苦手ではない」へ移行する過程には、学習者の持つ強い「目標達成動機」が大きく影響し、英語スキルと経験の継続的な上昇が関わってくることが窺われた。

4 研究Ⅱ「日本人英語学習者の英語対話における流暢性の研究—話者交替時における重複が示す学習者の流暢性の段階—」

一見流暢に英語を話す日本人英語学習者はどこまで母語話者に近づけるのか。対話の流暢性に焦点を置き、日本人学習者と母語話者との英語対話における流暢性の差異を、話者交替時の重複を基に検証する。さらに日本人学習者の経験やプロフィールに併せてそれぞれの重複の違いを考察し、学習者の英語対話経験が対話の流暢性に及ぼす影響を調べる。

4.1 研究方法 母語話者2名と非母語話者4名の1対1での英語での非対面タスク対話(地図課題対話)を非母語話者×非母語話者、非母語話者×母語話者、母語話者×母語話者の組み合わせで収録し、WaveSurferにより重複部分の抽出を行い、重複率と重複タイミングの比較、英語非母語話者それぞれの重複と英語対話経験の関連性の考察を行う。

4.2 考察 非母語話者が参加している対話では、明らかに母語話者同士の対話とは異なるタイミングで話者交替が行われていた(Fig.1)。非母語話者は高い英語習熟度を持ち一見流暢に話をしているように思えても、母語話者にとっての円滑なコミュニケーションを同様に取れていない可能性がある。英語対話経験と併せた被験者ごとの重複の結果から、中学入学前の英語習得経験がある非母語話者、英語対話経験が多い非母語話者ほど、母語話者に近い重複をし、その対話相手である母語話者も自然な重複をしている可能性が示唆された。

5 おわりに

アンケート、インタビュー調査から学習者の実態を探り、重複分析により流暢性ある対話の一側面を提示した。さらにより多くの様々な学習者の声や英語をデータとして取り分析していくことで、日本人独自の英語学習観・英語の特徴が掴め、スムーズな英語コミュニケーションを培うための英語教育への示唆となると考える。

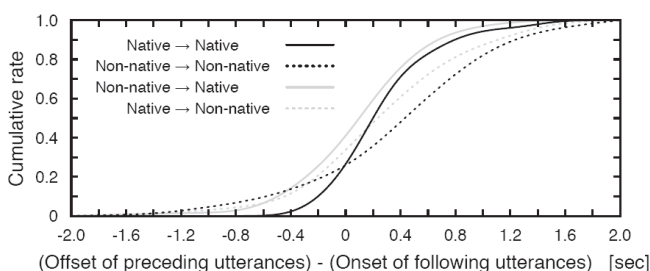


Fig.1 Timing of turn-taking (Cumulative)